

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

今月は最近読んだ『働かないアリに意義がある』長谷川英祐著 メディアワークス-新書 740円+税 の中から印象に残った話を伝えることにします。まず生き物世界は、非常に合理的に進化していると関心することが多いです。働きアリの世界では、若ければ安全な巣の中で幼虫や子供の世話に従事します。年齢が上がれば巣の維持に関わる仕事をし、最後に外にエサを取りに行くことになるそうです。外での活動は危険が伴うので余命の短い方が携わるのが労働力の無駄が少ないからと説明されます。ちなみに人が老人を大切にするのは、非常時に過去の知識の蓄積が多い集団が生存競争に勝つことが多かったためだとされています。兵隊アリと呼ばれる大型のアリは、実際に戦闘を行う種類は少数だそうです。他種のアリとエサの取り合いになった場合には、真っ先に逃げるそうです。最後まで諦めないのは小型の働きアリとのこと。兵隊アリはエサを取るときに重機のような働きをします。他のアリは自分でエサを巣まで運搬しますが、兵隊アリは数歩運んだあと放りだし、他のアリが運搬を引き受けます。役割にあった合理的な活動といえます。だから大事な重機であり成長までコストが掛かっている兵隊アリが実際の戦闘の関わることはほとんどないそうです。(同じ理屈で高額な兵器を所有する自衛隊が戦わないことがないと信じます。)利口なアリだけより ある程度バカなアリのいる方が組織としたうまくいくことも観察されています。アリはひとりで運べないエサを見つけると巣まで戻り応援を呼びます。その通り道にフェロモンによる目印をつけていると考えられています。たいていのアリは後をたどるのですが、道を間違えたアリが迷っているうちに近道を発見できます。間違えるアリがいた方がエサを巣まで持ち帰る効率上がるそうです。人間社会でも不良社員と言われた人が会社を変革される例もあります。真面目だけでは変化に弱いものです。2対8の法則(わずか2割のもの(人)が全体の成果の8割に貢献し、残り8割のものの生み出す成果は2割である)は、状況だけ見るとアリの世界にも当てはまるように解釈できます。しかし、能力は変わらないのに損得や利害、気分など個々の心の要因が行動に影響する人間と比較するのは問題です。著者によると働きたくないから働かないのではなく、働きたくても働けないような仕組みになっているのだそうです。たとえば、ゴミが散らかっていても、あまり気にしない人と潔癖症な人がいます。これを人間の組織では一定のルールを決め守らせることが可能です。しかしアリには情報伝達はできません。個体の本能的なものに頼るしかありません。その場合、個々のセンサーなどがあまり均質的では環境の変化によって全滅する可能性があります。したがって、個体別に活動のスイッチの違うアリを存在させ、全体として多少効率は悪くなるが、生き残るように進化したと解釈できるそうです。生き物ですから良く働くアリは、寿命が短い(過労死?)と考えられます。また、自分のためにしか働かないアリも少数だが存在するそうです。そうしたアリが増えすぎるとそのコロニーは滅びるそうです。人間の組織と同様です。